

◆第1回委員会(7/11)の主な内容、意見のまとめ

(1)美術館の基本機能の堅持が大前提

常設展示・収蔵・研究など、美術館の基本機能を大切にしていける、との認識を共有。

(2)目指す姿を「シーン」で具体化

「どんな風景(＝シーン)が立ち上がるか」を示すことで共通理解が深まり、到達点がより見えやすくなる、と整理。

(3)居場所性と“行きやすさ”の設計

関心の度合いにかかわらず誰もが立ち寄り、落ち着いて過ごせる条件をそろえていくことが大切、と確認。美術館を“居場所”として機能させる視点を重視。

(4)教育連携の強化(教育現場×美術館)

美術の先生の減少という現実を踏まえ、学校の学びとつながる来館の仕組みや、先生・生徒の学習の場を広げていく方向を目指す。

(5)美大・芸大不在地域の学びの場所を強化

関心の高い若者が“戻ってこられる”拠点づくりを進め、大学生や美術教員が継続して学べる環境を整えていくことが必要、と確認。館内でのデッサン等の学修や研究の場も視野に。

(6)美術やクリエイティブの受け皿としての場

美術館がハブとなって県内の多様な美術・クリエイティブ活動を受け止め、活かしていける“受け皿”となるべき、との指摘。子ども・若者の創造的エネルギーを育み、地域のクリエイティブな動きへ波及させていく視点を持つ。

(7)地域・県の“象徴”となる存在へ

「来てびっくりする」体験や、これまでにない見せ方に挑み、「あそこはすごい」と外部からも評価される象徴的な存在を目指す方向性で一致。

(8)間口の拡張とコミュニケーション

敷居を感じる層にも届くコミュニケーションで、「美術」の捉え方を広くとらえ直していく。あわせて、アンケートに定量インタビュー、メタファー型の問いを重ね、県民の潜在イメージを丁寧に汲み上げる。